

# Newsletter

2007 December No. 2



Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

## 学術の発展と人類の幸福のために

京都大学大学院教育学研究科教授  
心が活きる教育のための国際的拠点・拠点リーダー  
<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/>

子安 増生



「論理と感性の先端的教育研究拠点」の採択、おめでとうございます。

グローバル COE の前身の 21 世紀 COE プログラム平成 14 年度採択分のうち、「心」を研究する 4 つの拠点（北海道大学、慶應義塾大学、お茶の水女子大学、京都大学）が引き続きグローバル COE として活動を継続できるようになったことは、まことに欣快事です。また、慶應義塾大学グローバル COE が「ロゴスとパトス」の関係という古典的かつ現代的なテーマを設定されたこと、その慧眼に敬意を表させていただきます。

京都大学でも、21 世紀 COE 「心の働きの総合的研究教育拠点」を発展的に継承した「心が活きる教育のための国際的拠点」が採択されました。心理学分野と教育学分野の有機的連携により、実証学・実践学・臨床学の三学を柱とし、「幸福感の国際比較研究」を実施し、国際的ネットワークづくりを進めていきたいと考えております。慶應義塾大学ともグローバル COE の活動を通じて今後一層の連携を深めていきたいので、よろしく願い申し上げます。

まことにタイミングがよいことに、慶應義塾大学と京都大学とは「ヒト・社会・地球」のための連携協力を推進するため、2007 年 9 月 27 日に連携協力に関する基本協定書に調印いたしました。協定が目指すところは次の 3 点です。

- (1) 基礎から応用までの各領域での共同研究・研究協力の推進。
- (2) 大学の博士課程以上の学生・ポストドクの研究における武者修行の場。
- (3) 一校だけではできない、より大規模な研究国際ネットワークの構築・発展。

グローバル COE の巨額の資金が一大学や一研究分野の発展だけを目指すものにすぎなければ、国民からの理解と支持は得られません。学術全体の発展と人類の幸福に貢献することによって、拠点の説明責任を果たすとともに、そのような活動を通じて研究者の心も生きてきます。重ねてよろしく願いします。

## Contents

学術の発展と人類の幸福のために 子安 増生	1
各班研究紹介	2
リサーチパークで行われる 研究の紹介	4
活動報告	6
研究員紹介	8

# 各班研究紹介

## 脳と進化班

辻井岳雄

「脳と進化」班では渡辺茂（文学部教授）の下、論理と感性に関わる高次脳機能の研究、及び系統発生的研究を行っています。ヒトの高次脳機能では、近赤外分光法（NIRS）と経頭蓋磁気刺激（TMS）を用いた研究が行われています。頭皮上から弱い近赤外光を照射すると、光は脳内で散乱・吸収を繰り返し、大脳皮質まで侵入し、一部は頭皮上に戻ってきます。NIRSはこの原理を利用した光イメージング法で、脳神経活動に対応して変化する脳血管内のヘモグロビンの変化を計測する装置です。また、TMSとは微小な磁気刺激を脳に与えることにより、局所的な神経活動を一時的に促進あるいは抑制する装置です。TMSを用いることにより、光イメージング法とは逆の角度から高次脳機能を検討できます。

NIRSを用いた研究では、意味内容などに流されずに論理推論を行うときには特に右半球の外側前頭前野の酸化ヘモグロビ

ン濃度が上昇することが明らかになりました。TMSを用いて同じ部位に抑制性の磁気刺激を与えることにより、この部位の論理推論における機能的役割をより明確に示すことができます。また、感性情報処理の研究では一般に眼窩前頭前野などが強く関わるが知られていますが、我々のNIRSを用いた研究では、宗教画などの有意味な絵画をみるときは左半球の前頭前野の酸化ヘモグロビン濃度が上昇することが明らかになりました。この現象についても、TMSを用いたさらなる検討を予定しています。

NIRSとTMSの主な欠点として、大脳皮質の比較的浅い領域しか検討できないことが挙げられています。この欠点を補うために、本GCOEでは機能的MRIの導入作業を現在進めています。機能的MRIの導入により、脳深部の計測が可能になるとともに、正確な位置決めの下でNIRSやTMSの研究を行うことができるようになり、本GCOEの研究が向上することが期待されます。

## 遺伝と発達班

安藤寿康

遺伝と発達班で取り組んでいる研究の一つに、児童期初期の双生児の認知能力の発達研究があります。いま3歳半になった双生児を対象に、K-ABCという発達検査や他者の心を理解する能力を中心とした認知的課題を実施し、これを小学校に入るまで縦断的に追跡して、認知能力の発達に及ぼす遺伝要因と環境要因の安定性と変化を明らかにすることが目的です。欧米の同様な研究から、この時期は新たな遺伝要因が次々と発現する可能性が示唆されているのですが、同じことが日本でもいえるのか、もし異なるとしたらどのように異なるのか、などを明らかにしていこうというものです。

毎週日曜日の朝から、西別館の社会学研究科実習室に3組の小さいふたごちゃんとそのご家族が集合します。彼らは丸一日がかりで、いろいろなテストを、お勉強やお遊びの雰囲気の中で、順々にこなしていきます。この実習室は、観察用のカメラも備えられた広い観察室や、調査のあいだ親御さんたちに待っていただく

ための広い廊下スペースがあります。このプロジェクトのために、新たにソファと椅子、こどもたちが遊ぶための1辺20センチもある柔らかくて大きなブロックのセットなどを揃え、親子ぐるみの研究施設としても充実してきました。カメラは新たに、より性能のよいものが取り付けられる予定です。

子どもの研究は、まずはその安全性、それから思い通りにデータを取らせてくれない気まぐれさにつきあうためのゆとり、そして安心して参加してもらえることをきちんと親御さんたちに理解していただくための丁寧なことばや態度が不可欠です。テスターとして仕事に関わるスタッフが、マニュアルに従うだけでなく、自律的に、誠意を持って関わることが研究の成果に大きく関わってきますが、幸いその点でも優れた人材に恵まれ、よいスタートを切ることが出来ました。象牙の塔の中の研究者としてだけでなく、このような心の通うイベント遂行の能力も問われています。

人間が行う認知的課題の中には、言語の使用が必須であるものもあるが、言語を用いても用いなくても可能なものもある。認知心理学的な研究は、後者のような課題では言語の使用が認知処理を妨害する可能性があることを明らかにしている。言語と認知班の中で、私は、同じ課題を言語を用いて行う場合と用いずに行う場合の違いについて研究している。

よく似た架空の生物を2つの種に分類するといったカテゴリーの学習においては、一般に、カテゴリーが多くの特徴次元を持つと、個々の特徴次元に注意が分散するため学習が難しくなると考えられてきた。しかし、いずれも最低3つの特徴次元に注目すれば弁別が可能で、特徴次元数4もしくは8のカテゴリーを比較すると、架空生物の絵を見て学習する場合に次元数8のカテゴリーの方が学習が容易であることが示されている。私の研究室では、同様のカテゴリー学習を、各生物の特徴を言語化したリストを用いて行うとどのようになるかを検討した。実験の

結果、言語リストを用いた条件では、少ない試行数で学習が進み、特徴次元数による学習容易性の差が消失した。詳細な分析を行うと、絵を用いた学習では、言語を用いた場合より学習に要する試行数は多いが、1試行に要する時間は特徴次元数にかかわらず短いこと、言語を用いた場合には、特に特徴次元数が多い条件で1試行に要する時間が著しく長くなることが明らかになった。また、絵を用いた場合には、より少ない数の次元に基づいた判断がされるが、言語を用いると必要以上の次元に注目していることも示された。

言語を用いない場合には、効率的で素早い認知処理が行われるのに対し、言語を用いると着実ではあるが、非効率的でゆっくりとした認知処理が行われるようである。この違いが、直感と分析、感性と論理、という軸で捉えることができるのか、さらに研究を進めていくつもりである。

## 哲学・文化人類学班

班の文化人類学グループの研究特徴を略記する。7月、マギル大学 Allan Young 教授を基調講演者とした国際シンポ「文化医療臨床人類学の新展開」（計2日間発表7、コメント5）を開催し（前号参照）、現在は3月1日開催予定のシンポジウムを準備中〔提携予定のマギル大学グループから、インド、カナダ等で医療人類学現地調査をおこなってきた Ellen Corin 教授を招聘予定〕。初年度は以下の2本を研究の柱とする：(i) <「論理と感性」をめぐる文化人類学的研究という新研究領域がどう設定可能か>という探索的テーマ、(ii) <文化人類学的医療研究の国際的先端的展開の一端としての研究シンポジウム開催>。以下では(i)についてだけ述べる。「文化と感情」研究を深める医療人類学は現在先端的な成果を生み、ダイナミックな活気ある分野となっているが、更に根底的な文化人類学的再検討を加えてこそ深化しようと思う—社会文化過程の哲学的な経験的研究ともいしかえうる文化人類学だが、それが志向する文化社会的世界観＝認識論研究の座標系こそが、文化と医療に関連する論理と感

性・感情の研究を深掘りにする原点となると判断するからだ。この方向の究極に横たわる問題地平を先取りするというなら—説明ぬきで唐突な印象となろうが—社会的過程に媒介された集合的合理性というものの特質を文化比較の人類学的方法によって取り出し、それらの複数の集合的合理性の間でどのような相関的移行や転換や収束がなされるかをテーマとする研究地平であろうと思う。その地平にむかうには多岐にわたる既存諸研究を横断的に検討すべきなのだが、現在は以下のような研究課題を考えている：(1) 合理的論理的判断に相反する「習俗」のうながす行動、その力とはなにかを探る（アフリカ地域の研究者を交えて事例検討をしつつ、妖術は合理性かどうかで論争された人類学・哲学論争を振り返り、社会的集合的論理たる習俗を現代人類学の地平にたつて捉える探索的研究）、(2) レヴィ＝ストロースの「野生の思考」を認知系進化心理学の最近の知見との関連で再検討する（第一人者を招きフランス等の研究に照らして、複数の思考様式を研究する枠組みの再検討）。

## 論理・情報班

私はこれまで主に哲学史つまり哲学の歴史という角度から哲学という学問に取り組んできました。これは思想史についての純粋に学問的な興味ということもさることながら、現代哲学そして今日私たちが取り巻く様々な哲学的問題にアプローチするに際して、歴史的方法が一つの有効な手段を与えてくれるとの信念によるものです。問題のよってきたる思想史的な脈あるいは枠組みを可視化し相対化することにより、私たちは問題にたいする理解を深めることができるからです。

私の所属する本センター論理・情報班は、論理と感性をめぐる様々な問題にたいして、現代論理学の観点からそしてその方法論を用いてアプローチすることをその目標の一つに数えますが、そのさい私たちは自らが拠って立つ学問的立場および自らが採用する方法論にたいして常に反省的、批判的でなくてはなりません。私は上述の考えのもと、現代論理学の誕生を可能にし、またその方向性をいぜん条件づけているとも言える、19世紀後半から

20世紀初頭にかけての数学・論理学・哲学における基礎概念についての考察を行っています。より具体的には、デデキントからヒルベルトへと継承発展される基礎論プロジェクトにおける「厳密化」「形式化」「算術化」によって目指されたものと、それがもたらした諸帰結、そしてさらに時代を下って、ゲーデル、チューリングらによる「計算可能性」概念の定式化の分析を通じての、「計算」概念の再検討などに取り組んでいます。また、前世紀末の科学的思考を動機づけている新カント派をはじめとする哲学的（認識論的、存在論的）主張の内容を明らかにすることも課題の一つです。これらの研究は、フッサール、ヒルベルト、ゲーデルの数学の哲学（そして、殊に彼らにおける「直観」概念）に対して現代論理学の視点からその可能性の照射を試みる、グループリーダー岡田光弘教授のお仕事と有機的かつ補完的に関連していることも注記したいと思います。



# リサーチパークで行われる研究の紹介

## マーモセット高次認知機能研究施設の開設

本 GCOE では医学部生理学教室、理化学研究所象徴概念発達研究チーム、実験動物中央研究所の協力を得て、医学部リサーチパーク内にマーモセットラボを開設する運びとなった。この施設は霊長類での研究を目指す若手研究者にマーモセット高次認知機能の研究を通じて実験技法、動物の管理などを教育するものである。論理と感性の基礎研究には、系統発生的比較研究と脳研究が不可欠であるが、この施設はそのような要求にこたえるものである。

リサーチパークは医学部信濃町キャンパス内にあるレンタルラボであり、1区画 100 平米である。ここにマーモセット飼育室と実験室を設置する。マーモセットは小型サルであるが、繁殖効率がよく、飼育が容易、小型 (300-400 グラム程度) であるためにスペースをとらないなどの利点があり、次世代の霊長類実験動物モデルとして注目されている動物である。行動実験としてはウーン大学が、脳研究としてはケンブリッジ大学がそれぞれマーモセットを使っており、実験動物中央研究所では行動薬理学の実験にも用いられている。霊長類による高次認知の研究の利点はヒトと近縁であることだが、大型類人猿での侵襲的実験は禁じられている。また、マーモセットは社会性が強く、社会行動の動物モデルとして優れているばかりでなく、複雑な聴覚コミュニケーションを持つ、という他霊長類実験動物に見られない特徴をもっている。さらに、医学部と実験動物中央研究所ではゲノム解析を進めており、遺伝子レベルでの高次認知機能の解明が期待できる。

GCOE「脳と進化」班では、高次認知の実験系の構築をおこない、1) 情動的判断と合理的判断の相克と考えられる衝動的選択 (impulsive choice) の事態においてマーモセットがどのような場合に、どのようにして自分の衝動的選択をコントロールできるのか、2) アルゴリズムによる判断とヒューリスティクスによる判断の相違は、ヒトの場合は前者においてそのプロセス

を言語的に報告できる点にあるが、マーモセットにみずからの判断の過程を弁別刺激とした判断が可能であるか、を明らかにする。

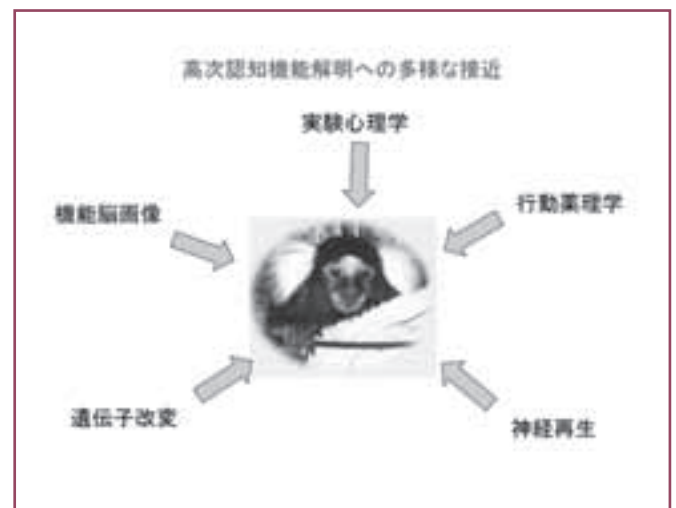
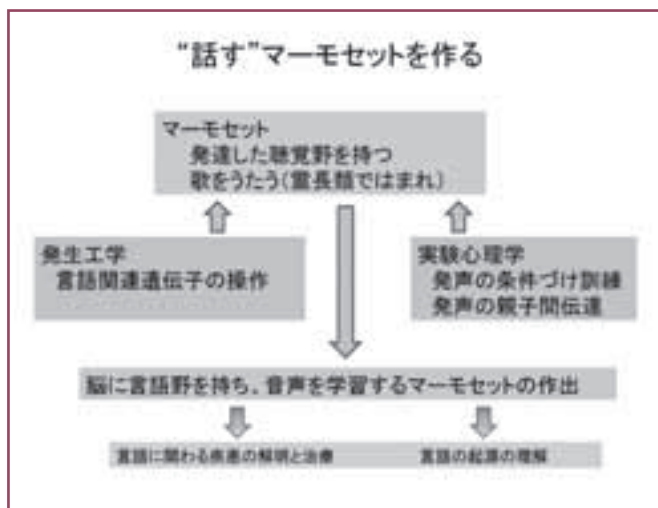
医学部生理学教室では脳機能画像解析の基盤となる、マーモセットMRIのテンプレートとなる標準脳電子ライブラリーを作製し、最終的にはマーモセットでのfMRI研究を目指す。また、マーモセットを用いた発生工学の手法を確立する。医学的にはアルツハイマー、パーキンソンなど認知障害を伴う疾患の解明が急務であり、マーモセット認知研究はこれらの解明の基礎になるものである。

理化学研究所では高次認知機能による脳のマクロ変化を形態画像解析によって検出し、それに対応する遺伝子発現、軸索・シナプス新生、神経新生の時空間パターンを検討する。さらにマーモセットに遺伝子導入技術を用いて、ヒトの言語システムと類似した聴覚発声制御系を脳に構築し、このマーモセットに言語訓練を行うことによって、ヒト言語の発生メカニズムを解明する。このような個体の論理的判断の研究は、論理と言語との関係の解明に大きく寄与するものである。

最終的にはマーモセットをモデル動物とした論理と感性の脳内機構が解明され、遺伝子改変による言語行動解明の基礎データが得られていることを目指すが、個別目標としては、1) マーモセット脳において論理系と感性系の機能マッピングができていないこと、2) マーモセット脳において道具使用、社会的協力行動の機能マッピングができていないこと、3) 遺伝子改変マーモセットが作成され、その音声行動が分析されていること、が挙げられる。

この施設は動物実験施設であるが、言語学、認知心理学、発達心理学、論理学その他多くの分野からのアイデアを取り入れていきたい。是非、多くの助言をお願いしたい。

(渡辺 茂)



## CARLS ロゴの成り立ち

CARLS ロゴのモチーフである天秤は、ヴェネツィア発祥の地、トルチェッロ島にあるサンタ・マリア・アッスンタ聖堂のモザイクに着想を得ています。聖堂の西壁面全体を覆うモザイクは、12 - 13 世紀に制作され、キリスト教美術の主題である最後の審判を表しています。最後の審判においては、大天使ミカエルが人間の魂をとりあげ、善行と悪行のどちらが優っているかを計量しますが、その際に天秤が用いられるのです。

天秤はまた、西洋美術において、伝統的に論理学の擬人像が持つ象徴物でもあります。論理学は、天秤で真と偽を量ります。

私たち、論理と感性の先端的教育研究拠点では、ヒトの活動の中で論理 (Logic) と感性 (Sensibility) がどのようなバランスのもとに働いているのかを、さまざまな観点から探っていきます。あるときには、天秤は論理の方に傾き、またあるときには感性の方へと傾くことでしょう。

そのような意味を込めて、このロゴを作成いたしました。

(星 聖子)



トルチェッロ島、サンタ・マリア・アッスンタ聖堂扉口上壁面モザイク (部分)

## CARLS ウェブサイト紹介

2007年12月よりCARLSのウェブサイトが正式に公開されました。サイトはいくつかのページに分かれています。「概要」のページには、当拠点形成の目的が書かれているほか、拠点の全体図が掲載されています。そして、組織に含まれる事業推進担当者のリストや運営体制の組織図は「組織」のページで、また関連施設のリストは「施設」のページでご確認いただけます。事業推進担当者名の多くは個人の研究紹介ページや、研究室紹介のページにリンクしており、各担当者の研究内容を詳しく知ることができます。一方、「活動報告」のページにはこれまでに開催された講習会、研究会、シンポジウム等の情報が掲載されており、トップページではそれらについての最新の情報がご確認いただけます。また、一部の講習会、シンポジウム等につきましてはストリーミング配信 (リアルタイム配信及びオンデマンド配信) も予定しております。さらに、「刊行物」のページでは、

当拠点に関連する書籍や報告書のリストが掲載されるほか、本ニュースレターがPDFファイルで閲覧できるようになる予定です。また、公式ウェブサイトとは別に拠点関係者用のウェブサイトが公開される予定です。このサイトは研究支援を目的としたサイトで、拠点附属施設の施設利用予約システムや実験スケジュール管理システム、アーカイブ検索システムやストレージサービス等を提供する予定です。今後、コンテンツをさらに充実させ当研究拠点の活動状況を詳しく紹介して参ります。

(熱田匡紀)



<http://www.carls.keio.ac.jp/>

### グローバル COE プログラム

慶應義塾大学「論理と感性の先端的教育研究拠点形成」、  
京都大学「心が活きる教育のための国際的拠点」

### 共催シンポジウム

「理屈? 屁理屈? 理屈めき? —考える心、感じる心—」

日 時：2008年1月19日(土) 10:00 ~ 18:00(9:30 開場)  
場 所：東京国際フォーラム B7 ホール  
東京都千代田区丸の内 3 - 5 - 1  
JR 山手線「有楽町駅」、東京メトロ有楽町線「有楽町駅」  
から徒歩 1 分

#### 参加無料

定員 500 名 (先着順) \*定員に達し次第締め切らせていただきます。

参加申し込み方法：お名前、ご住所、電話番号または E メールアドレスをお書きの上、FAX またはお葉書をお送りください (宛先は最終ページをご覧ください)。

### プログラム

第 1 部：10:00 ~ 11:30

研究紹介：渡辺 茂 (慶應義塾大学 論理と感性の先端的教育研究拠点リーダー)

研究紹介：子安増生 (京都大学 心が活きる教育のための国際的拠点リーダー)

第 2 部：13:00 ~ 15:30

講 演：瀬名秀明 (薬学博士、作家、東北大学機械系特任教授)

対 談：田尻悟郎 (関西大学教授)  
大津由紀雄 (慶應義塾大学教授)

ポスター発表

第 3 部：15:30 ~ 18:00

講 演：安西祐一郎 (慶應義塾長)

パネルディスカッション：

藤田和生 (京都大学大学院教授)

鈴木晶子 (京都大学大学院教授)

伊東裕司 (慶應義塾大学教授)

※その他の講演者も登壇の予定です。

## 活動報告

開催日	研究・運営プログラム名	会議等の名称
9月7日	言語と認知班	意味論研究会①
10月17日	脳と進化班	Perception of Biological Motion
10月20, 24, 31日	研究発信支援プログラム	英文論文執筆推進のための連続講習会
10月23-25日	国際教育研究プログラム	Keio-Vienna Joint Seminar: Experimental Studies of Social Cognition in Birds.
10月26日	言語と認知班	意味論研究会②
11月5日	哲学・文化人類学班	Prof. C.C.W.Taylor 講演会 “Aristotle on Eudaimonia”
11月15日	論理・情報班	日韓哲学交流の集い
11月30日	言語と認知班	意味論研究会③
12月7日	論理・情報班	Plato the Socratic
12月15日	言語と認知班	ことばの力を育む—小学校英語を超えて—
12月17日	哲学・文化人類学班	Reason and Voluntariness
12月17日	脳と進化班	第109回バイオサイコシンポジウム
12月19日	研究発信支援プログラム	アメリカ合衆国における外国人 PD、研究者の現状
12月22日	脳と進化班	衝動性の科学—感情・行動・合理性—

### 意味論研究会①、②(9月7日、10月26日開催)

Over the past two months we have had two meetings of the Semantics Research Group.

On October 26, David Yoshikazu Oshima of Ibaraki University gave a presentation titled *Topichood, Givenness, and the Particle wa in Japanese: Reconsideration and Reconciliation* at Hirosaki Gakuin University. In this talk Professor Oshima presented a semantic analysis of one major function of the particle *wa* in Japanese, an analysis that integrates and reconciles two major approaches: the topichood-based approach and the givenness-based approach. He showed that neither approach on its own can constitute a complete theory of thematic *wa*, but at the same time argued that a combination of the two approaches can yield a potentially adequate theory. He proposed in particular that *wa* marks a topic only when it is associated with certain grammatical functions, such as (direct or indirect) object, while it merely indicates givenness (groundness) when

it is associated others, including subject. In other words, the function of a given occurrence of (thematic) *wa* is determined only in conjunction with the grammatical context surrounding it.

On September 7, Hiroki Koga of Saga University gave a presentation at Keio University titled *A Grammar of Tense and Verb Morphemes with the Standard Japanese and the Saga Dialects as Its Initial Scope*. In this talk Professor Koga presented a grammatical analysis of tense and verbal morphology in Saga dialects. He argued for a reanalysis of Saga morphology based on two central ideas: (i) that the so-called tense morpheme /u/ does not indicate the time of an event but is rather timeless; and (ii) that a verb-final /r/ selects a base verb form as its complement. He showed how these two ideas could be used to account for syntactic, phonological, phonetic and semantic peculiarities of the Saga dialects. (Christopher Tancredi)

### 研究発信支援プログラム 英文論文執筆推進のための連続講習会(10月20、24、31日開催)

表題の目的で、2007年10月20日、24日、31日に講習会を実施した。1回目はプログラム責任者の小嶋が、2、3回目は国立精神神経センターの中村克樹氏が講師である。各回90分で、参加者は慶応義塾および他大学の大学院生を中心に約30名であった。

小嶋は国内外への出張や英文校閲、雑誌掲載への補助に関する事務手続きを説明した。続いて、雑誌の impact factor (IF) と各論文の引用度数の検索法を会場で供覧した。IF は雑誌のレベルの目安になり、論文を投稿するときの参考になることを紹介した。引用度数の検索は、このような点を考えたことがなかった若手研究者の意識改革の意味で実施した。

中村氏は論文、特に多くの人が目を通す英文論文を持つことの重要性を語った。科学は一人で行うものでなく、多くの研究者

が知識を共有することで発展する。もし論文を執筆しないなら、その発展に寄与できない。和文論文と比較して英文論文は多くの研究者の目に留まりやすい。それゆえ、極力英文で執筆すべきだ、という主旨であった。また、IF だけでなく、掲載論文がどれほど長く引用されるかという項目にも注意すべきなど、IF のもつ問題点も指摘した。中村氏はさらに、研究成果の発表を競うあまり、不正を行う例があることを紹介し、そのようにならないよう注意を喚起した。

最後に小嶋が補足し、英文を書くことは能力でなく習慣の問題であること、英文論文を持つことが研究者としてやっていくことの基本的な条件であることを話した。以下は霊長類研究所にいた某氏の言である。正しい英語が分かりませんが、Publish, or perish! (小嶋祥三)



## “Global COE symposium on Perception of Biological Motion”

日時：10月17日(水曜日) 13:30 - 18:00 場所：慶應義塾大学三田キャンパス 東館 G-SEC6 階

企画者：渡辺茂、山本絵里子(慶應義塾大学)

平成19年10月17日(水)、慶應義塾大学三田東館G-SEC6階において、“Global COE symposium on Perception of Biological Motion”が開催された。Nikolaus, F. Troje先生(クイーンズ大学)が日本学術振興会招聘研究者として慶應義塾大学を訪問するにあたり、本シンポジウムは企画された。現在、心理学の分野において、バイオリジカルモーションは、その知覚研究のみならず、社会的認知機能や社会的認知機能を担う神経機構を検討するために広く使用されている。そこで、本シンポジウムでは、バイオリジカルモーションについて、多角的側面から議論することを目的とした。塾外から、Nikolaus, F. Troje先生(クイーンズ大学、日本学術振興会招聘研究者)、平井真洋先生(自然科学研究機構生理学研究所)、そして、山口真美先生(中央大学・科学技術振興機構さきがけ)を講演者として招聘した。また、塾内か

らは菊池菜穂子(慶應義塾大学)、山本絵里子(慶應義塾大学)が講演を行った。本シンポジウムは、バイオリジカルモーション知覚について、心理学、コンピュータサイエンス、そして、脳機能研究などの様々な視点から議論する機会となり、大変意義深いものであった

(山本絵里子)



## Prof. C.C.W.Taylor 講演会 “Aristotle on Eudaimonia” (11月5日開催)

クリストファー・テイラー教授は、古代ギリシア哲学の研究において長年世界をリードされてきたオクスフォードの碩学で、原子論者、ソクラテス、プラトン、アリストテレスについて代表的な研究書を出版されている。これまで韓国で講演する機会をもっておられたが、今回はその折に日本にも足を延ばしていただき、東京での初講演となった。主題は「アリストテレスのエウダイモニア論」で、20名ほどの聴衆と活発な議論を交わされた。特に学生

からの質問を求められるなど、温厚な教育者としてのお人柄にも接することができた。

アリストテレス『ニコマコス倫理学』の主

題である「エウダイモニア」—通常「幸福」happinessと訳されるが、そういった近代語訳がもつ問題性も指摘された—の理解は、それが様々な善きものの総合であるか(inclusive)、単一の善を専らに目指すものか(dominant)で、研究者間の論争が続いてきた。テイラー教授は、議論の流れを慎重に分析されながら両解釈を調停し、アリストテレス倫理学の全体像を「政治学」も射程に入れながら示された。とりわけ興味深かったのは、「フロネーシス」(賢慮)に二重の重要な役割を見る解釈で、バランスのとれた刺激的な読み筋に視野を啓かれた。

講演会では、事前にペーパーを配布できなかったため、綿密な議論に対して詳細に立ち入った質疑ができなかったことがやや残念ではあるが、古代ギリシアの専門研究者だけでなく、隣接分野の方々や学部学生からも大きな文脈で疑問を提示していただき、楽しく有意義な議論ができた。主催者として感謝申し上げたい。(納富信留)



## Keio-Vienna Joint Seminar (10月23-25日開催)

ウイーン大学は本GCOEの国際連携拠点の一つであり、L. Huber教授は事業推進担当者のひとりでもある。今回の講義は生命科学部の“The evolution of Social Cognition”というレクチャーシリーズの一つとして招聘されたものである。事前によくつかの選択肢を提示したが、“Experimental studies of social cognition in birds”がよかろうということになり、鳥類の種弁別、個体弁別、個体の行動の弁別、模倣、それらの脳内機構、といったトピックスについて講義を行った。講義終了後はちょうど季節であるのでグリーンツイングでホイリゲ(新酒)を楽しんだ。以前

にキンギョにバッハの曲を聴かせる実験をして、あまりうまく行かなかった話をし、ついでに、マスにシューベルトを聴かせればうまく行ったかもしれない、という冗談を言ったら大変にうけた。

(渡辺茂)



## 研究員紹介



### 石津智大

今回、人文グローバルCOEの非常勤研究員になりました石津智大です。ヒトは身体像の認識を通して自己・他者をどのように弁別しているか、また、視覚領域における皮質間の相互作用と視覚認識との関連といったテーマを、EEG、NIRS、MEGを用いて研究してきました。

最近では、予期から逸脱した刺激を脳がどのように自動的に検出しているのかについて、顔・身体像を用いて研究しております。どうぞよろしくお願致します。



### 菅佐原洋

現在まで、発達障害児の読み・書きなどのリテラシー学習における困難に対し、応用行動分析の観点からコンピューターを用いた教材を作成し、支援を行う介入研究を中心に行ってきました。また読み・書きの獲得や学習に伴う脳の可塑性について、近赤外線分光法(NIRS)を用いた研究も行ってきました。

今回のグローバルCOEでは、文字や意味といった刺激間における等価な関係の学習やその派生的関係の成立における「論理」や、他者の表情認知といった社会的刺激に対する「感性」に対し、発達の観点、脳機能的な観点からアプローチしていきたいと考えております。



### 佐治伸郎

言語と認知班の非常勤研究員の佐治伸郎です。人間が創造的に言語を使用する為に必要となるスキーマの知識に大きな関心を持っています。例えば動詞や機能語が紡ぐ外界の事物の様々な「関係」の理解は、人間の多彩な言語運用を生み出すために必要不可欠なものです。子どもはこの

言語が織り成す「関係」の世界を、何を手掛かりに、どのような過程を経て構築していくのでしょうか。グローバルCOEではこのような問題意識を通じ、実験的手法を用いて人間の論理と感性の問題へとアプローチしたいと考えております。どうぞよろしくお願致します。

## 日本学術振興会特別研究員

(グローバルCOE)

### 秋山武和

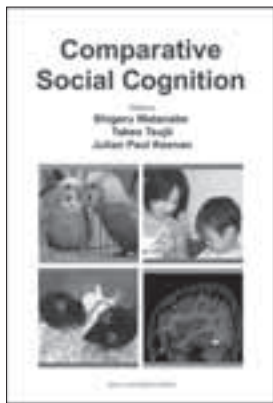


現在、慶應義塾大学医学部外科学教室脳神経外科専修医6年、大学院博士課程3年です。脳神経外科には機能的脳神経外科という分野があり、手術前に機能的MRI、MEG等を用いて脳の機能局を分析し、手術中もナビゲーションシステムや神経モニタリングを併用することで、できる限り脳機能を温存し正確に手術することを目標とします。今後は言語、運動機能を温存するだけでなく、様々な高次脳機能を正確に温存するような手術をする時代に入ると考えられます。機能的MRI、MEG、経頭蓋磁気刺激といったtoolを用いて研究を行い、様々な高次脳機能を解明していきたいと考えております。

## 事務局だより

### 関連書籍の紹介

“Comparative Social Cognition”



本GCOEの拠点リーダー渡辺茂、特別研究教員の辻井岳雄、モントクレア州立大学のJulian Paul Keenanの共同編集による社会的認知の論文集が慶應義塾大学出版会より刊行されました。これは、2006年8月に開催された国際シンポジウム「高次脳機能としての社会的認知」を元にしており、自己認知や社会的コミュニケーションなどの社会的認知を(1)高次脳機能として、そして(2)系統発生の結果として捉えた最

近の研究成果が本書にまとめられました。

ISBN978-4-7664-1444-8

### 編集後記

今号のニュースレターでは、各班のより詳しい研究内容や拠点ウェブサイトなど、当拠点のコンテンツの紹介に比較的多くの記事を割きました。現在、三田東宝ビル内の研究室の改装や、信濃町キャンパスリサーチパークでのマーモセトラボ開設計画などが進み、拠点の研究環境が次第に整いつつありますので、今後これらのコンテンツが一層充実していくことが期待されます。また、年明けには一般向けのものを含む2つの全体シンポジウムが企画されているなど、活動予定も目白押しです。ニュースレターでは今後も日々着々と進展する当拠点の活動を活き活きとお伝えできればと思います。(石井 拓)

### 活動予定

#### ● 第1回全体シンポジウム [Logic of Shadow]

日時：2008年1月11日

会場：慶應義塾大学 三田キャンパス 北館ホール

講演者：Roberto Casati、他

#### ● 第2回全体シンポジウム(一般公開シンポジウム) [理屈?屁理屈?理屈めき?—考える心、感じる心—]

日時：2008年1月19日

会場：東京国際フォーラム B7 ホール

\*詳細は5ページをご覧ください。

#### ● 第3回全体シンポジウム [Rational Animals, Irrational Humans]

日時：2008年2月9-11日

会場：慶應義塾大学 三田キャンパス 北館ホール

講演者：A. Young、L. Hurber、D. Lestel、他

\*詳しくは下記事務局までお問い合わせ下さい。

慶應義塾大学 論理と感性の先端的教育研究拠点  
Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility  
Newsletter 2007. December. No. 2

発行日 2007年12月26日

代表者 渡辺 茂

〒108-0073 東京都港区三田3-1-7 三田東宝ビル7F・8F

TEL : 03-5427-1156

FAX : 03-5427-1209

coe-office-al@flet.keio.ac.jp

http://www.carls.keio.ac.jp/